

平成 29 年度入試の出題の意図・採点総評



北九州市立大学

一般選抜

外国語学部	P 1
経済学部	P 3
文学部	P 7
法学部	P11
地域創生学群	P13
国際環境工学部	P14

推薦入試

外国語学部	P23
経済学部	P24
文学部	P25
法学部	P27
地域創生学群	P29
国際環境工学部	P29

A0 入試

外国語学部	P38
地域創生学群	P38

平成 29 年度入試の出題の意図、採点総評 《一般選抜》

◆ 外国語学部 前期日程（英語）

<出題の意図・ねらい>

試験では高等学校卒業程度の基礎学力とともに英語読解力、英語表現力を判定する。

問題 1 は長文読解。長文を正確に読めるか問う。英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか（問 1）、“any of this”が具体的に何を指すか正確に読み取れているか（問 2）、英文和訳の能力（問 3）を問う。

問題 2 は長文を読んで要約する問題である。英文がかなり複雑な箇所もあり、話の流れがきちんと把握できているかどうか、また英語がきちんと読みこなせているかを問う。

問題 3 は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

問題 4 は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

問題 5 は英作文。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを英文で書く能力を問う。

<答案の特徴と傾向>

問題 1

問 1 問 1 は記号で答えさせる問題で全体的によくできていたが、(2) の正解率は低かった。

問 2 問 2 は下線部の内容を記述させる問題であるが、主語にあたる部分を理解できず、ライト兄弟の話に終始する解答が多かった。正解率は高いとは言えない。

問 3 挿入節 2 ヶ所について前後との関係が読み取れていない答案、知覚動詞“see”の理解が不十分である答案、“another flying machine”の“another”の意味が正確に取れていない答案が多くみられた。

問題 2

200 字以内で要約するという制約のなかで、例を示したりすることで字数を多く使ってしまい、肝心な部分が記述できていない答案が数多く見られた。7 ページ 2 行目の“goes far beyond”を「行き過ぎ」や「やり過ぎ」と、ネガティブな意味と勘違いした解答が多く見受けられた。7 ページ下から 2 行目の“home”を「自国」ではなく「家」と訳している解答も目立った。6 ページの下から 4 行目の“the farther outside... , the greater...”の文章の意味を正確に理解できず、誤訳するケースが多かった。

問題 3

語彙力不足が目立った。未知の単語を埋め合わせようと文を完全に作り変え、全く異なる意味合いの文にしてしまった答案が見られた。原文を“original sentences”のように直訳してしまうケースも多かった。文脈に対応した正しい語彙と用法を学んでおくことが求められる。

問題 4

この問題は、「縦じま」や「一本気なイメージ」のような英訳が難しい表現を含んでいた。完璧な訳でなくとも、なんとか近い意味で英語にできた答案が高得点を得た。日本語の構造を正確に理解できていないまま強引に英訳しようとして、意味的にも文法的にも誤った英文を並べた答案が見受けられた。また image と imagine など、一見よく似た語の誤用も目立った。

問題 5

問題の内容に対して賛成するか賛成しないかは受験生の自由だが、個人的な意見が根拠に基づいて説明されたかどうかの評価の主な基準の一つであった。表現力も問われる問題で、問いの用語を単に並べ替えた解答よりも、正しい文法で豊富な語彙を利用した解答の方が高得点を得た。

◆ 外国語学部英米学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい><答案の特徴と傾向>

問題 1

問 1

内容を誤解している答案も散見されたが、全体的によくできていた。重要なポイントをきちんと理解しているかどうかを問う問題であったので、具体的な内容を誤解している答案はあまり得点できなかった。

問 2

論理的に自分の見解を主張する力を問う問題であった。ほとんどの答案が賛成の場合でも反対の場合でも、それなりに自分の見解を述べていたが、説得力のある議論展開ができている答案は少なかった。

問題 2

意味はわかるが、日本語を直訳したような英文が多く、英語らしい表現ができていないものが多く見られた。議論の内容も単純で、面白い発想の答案は少なかった。逆に、個性的で論理性のしっかりした答案は高得点となった。

◆ 外国語学部中国学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

齋藤孝氏の『語彙力こそが教養である』（KADOKAWA [角川新書]、2015年）から出題した。本書は「語彙とは教養そのもの」をコンセプトに5章から成り、第1章で語彙とは何か、語彙力の低下などについて述べ、第2章以降に語彙力アップのトレーニング、語彙のインプットとアウトプットの方法など語彙習得の実践について述べている。問題文は第一章から抜き出したもので、語彙力低下の要因として素読文化の減衰をあげ、実は素読が語彙の習得に効果的であることを述べている。日本語の語彙が対象であるが、語彙を増やすということは外国語の習得においても大事なことであり、問題文が、日本語はもちろんのこと外国語の語彙習得についても考えるきっかけとなればと思い、出題した。ただ作問の都合上「語彙とは教養そのもの」という点を盛り込むことができなかった。

問1は、内容を的確に把握してまとめられるかを問い、理解力、要約力を測った。問2は、本文を踏まえた上で自分の考えを論理的に述べられるかを問い、考察力、文章力を測った。

<答案の特徴と傾向>

問1 長い本文から何をエッセンスとして取り出し、どうまとめるかが問われている。過不足なく取り出せているか、取り出した箇所どうしのつながりがわかるようにまとめられているか、ということをもう少し考えてもらえると良かったと思う。

問2 答案は素読に賛成の立場で論じるものがほとんどであった。自らの経験に触れながら素読の効用を述べる答案のほか、素読に何か一書きながら読む、覚えた語彙を実際に使うなど一を加えて、よりいっその語彙の定着をはかることを述べる答案もあった。構成を考えて論理的に書かれた答案はあるにはあったが、論理的に述べられず説得力に欠ける答案や思いつくままに書き連ねたように見受けられる答案も少なくなかった。

◆ 外国語学部国際関係学科 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

平成 29 年度の一般選抜後期日程入試では、日本での英語の早期教育の導入について取り上げ、受験生の読解力および論理的展開力を問うことにした。課題文を3つ与え、問1では、資料1を要約させた。問2では、3つの課題文を参考にしながら、英語教育の早期化について賛成・反対それぞれの意見の内容をまとめるとともに、その意見の相違はどこから生じるのかを論じさせた。

<答案の特徴と傾向>

問1 全体的によくできていた。課題文を丸写しする解答が散見された。

問2 全体的によくできていた。ただし、問いに沿っておらず、自分の意見を主張している答案が見受けられた。また、問いを理解し、論点を整理しきれない答案も見受けられた。

◆ 経済学部 前期日程 (英語・数学)

《英語》

<出題の意図・ねらい>

I、II

基本的な文法の知識と語彙力を有しているか、それらを活用してやや複雑な構文を解釈することが出来るか、さらに、文を超えたレベルで文脈を踏まえて英語を理解し、筆者の考え・主張を正しく捉えることが出来るかを見る。

Ⅲ、Ⅳ

与えられた日本語の文を適切な表現を用いて文法的に正しい英語に訳すことが出来るかを見る。特に、日本語には現れない主語を英文において正しく訳出出来ているかを見る。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ

問 1

正答率が 50%程度であった。

問 2

正答率が 50%程度であった。

問 3

Trading, speculators, means, share, changes hands の訳ができていない答案が多かった。
主語＋means (that)～という構文を半分以上の受験生が理解していなかった。

問 4

内容は正しいが日本語で解答しているものが目立った。

問 5

本文最終文を逐語訳した解答が多く、本文内容を深く読み取れている答案は少なかった。

問題Ⅱ

問 1

定冠詞 the は前方照応であるので、下線部 the statistics は前文の 35%であるにもかかわらず、段落後半の 60%、81%、7 out of 10、33%等と考えている解答が多かった。
“apply to”が正しく訳せていない。

問 2

本文にある「ある女性がイタリアンレストランを開業する」という話は具体例ではなく、架空の設定で一般的な事例であるということが理解できていない。

“adopting”への言及がない。

問の”Find examples of this.”に対応していない。

“outside view”の内容理解が不十分であった。

問 3

得点率はかなり低かった。

出題文の後半に説明されている内容（「損失が倍化する」）を説明できている答案は少なかった。

単に「損失やリスクや費用がかかる」と述べている答案が多く、部分点に止まった。

問 4

比較的簡単な構文を含む文章であったので、おおよその意味は理解できていた。

“Given ～”の部分で正確に和訳できている答えはほとんどなかった。

問 5

正答率はさほど高くなかった。

比較的意味の近い単語を選んでいる受験生が多かった。

問題Ⅲ

“precious”を誤って用いている答えが多かった。

問題Ⅳ

“essentially”を用いるべきところで”really”、”naturally”、”reality”、”truly”を用いるなど、語の選択が不適切な答えが多かった。

《数学》

<出題の意図・ねらい>

本学の数学入試では、基本的な問題が出題されています。いわゆる難問は出題されません。基本的な定理や公式の理解力と論理的な思考力を試すのがねらいです。単なる暗記力や計算力よりも、問題の分析能力と的確な判断力や工夫する力を見るのがねらいです。また、出題の範囲に十分注意してください。

<答案の特徴と傾向>

問題 1

数列についての基本的な知識を問う問題です。(1)(2)は、漸化式を計算し、漸化式から一般項を求める問いです。漸化式の特徴が理解できれば容易に解けます。(3)は(2)の結果を利用する問いです。(1)(2)(3)は、比較的良好にできていたのですが、「階差」と「公差」を混同している解答が見受けられました。(4)(5)は、数列の n 項までの和を計算する問いです。(4)は、正答率はやや高めでしたが、(5)は、少し複雑な式になることから、正解者は僅かでした。

問題 2

2次関数のグラフに関する問題です。(1)は直交する直線の式を書く基礎問題です。(2)は2次方程式を解く基礎問題です。解く方法がわかっても計算ができないのが見られました。(3)は2次関数と直線の間の面積を求める問題です。積分の計算なしで1/6公式を使えば早く解答できます。ただし、その公式を覚えても、 x の係数を忘れていた答えが多く見られました。(4)は少し難しい図形の問題です。解答方法は一通りありますが、根気よく緻密な計算をクリアできれば正確に解答できます。途中まであきらめたのが大半です。(5)は微分に関する基礎問題で容易に解答できます。ただし、(3)と(4)を解けないと、(5)へ進めることができません。

問題 3

全体に、問題のできはよくありませんでした。三角関数や平面図形の計算を正確に計算できていませんでした。図形の性質を使って、計算を簡素化する練習もしておきましょう。(1)では、題意をきちんと理解して図を正確に描き図形的な性質を使った方が簡単だったようです。正答率も高めでした。(2)は、図形的な性質のみに頼るよりも座標平面で面積を計算するほうがよいようです。(3)では、直線が平行となる条件をきちんと

と計算できていませんでした。(4)は、計算が複雑だったためか出来が良くありませんでした。

問題 4

(3)および(4)は基本的な確率の計算問題です。これらの出来で差がついています。(3)は特によくできています。(1)、(2)および(5)は条件付確率の問題です。正解率は低いです。第一に、通常の確率と条件付確率の区別を問題文から読み取ることができていません。第二に、条件付確率の定義において、何を条件としてどの事象の確率を求めるべきか、正しく定めることができていません。特に(5)は難しかったようです。

◆ 経済学部 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

後期日程の小論文は、坂村健『IoT とは何か——技術革新から社会革新へ』からその一部を抜粋して出題した。今回は、小論文を通じて受験生の論理的思考能力を試したいという意図から、近い将来に迎える(だろう)と思われる「IoT 社会」(社会全体のロボット化)をテーマとする本書を選んだ。

4つの設問のうち、設問1～設問3は、課題文の内容を十分に理解したうえで、制限された字数内で簡潔に纏める能力をみる問題であり、設問4は、課題文の内容を踏まえたうえで、自身の考えを論理的に表現・展開する能力をみる問題である。

<答案の特徴と傾向>

課題文そのものの内容は比較的易しいと思われるが、全体を通して、意外と点数は低かったように思う。

設問1については、本文中の比較的長い文章を、制限された字数内で簡潔に纏める能力が問われるが、本文中から解答として抜き出すポイントすべてに触れている答案はあまりなく、予想に反して、正答率は低かった。

続く設問2については、解答として求める内容が直後の文章の中にあったせいか、正答率は比較的高かったように思う。

また、設問3については、文中の言葉について十分意味が分かっていないにもかかわらず、適当に使っているものが散見された。本文中から解答として抜き出すポイントがいくつかあると思われるが、すべてのポイントに触れているものが少なかった。

さらに、設問4は、自身の考えを論理的に表現・展開する能力をみる問題であるが、受験生には、こうした問題に対してどうも苦手意識があるようで、総じて点数は低かったように思う。解答にあたっては、課題文の内容を正しく理解し、自身の考えを矛盾なく、大きな論理的飛躍がないように論じることが必要であるが、課題文の内容を十分に踏まえて自身の意見を述べているものは少なかったように思う。なお、来るべきIoT社会(社会全体のロボット化)についての意見として多かったのは、やや通り一遍のように思われるが、「雇用が減る」、「便利になる」、「人間の思考力を奪う」というものだった。さらにもう一段の深い考察が必要なのにも思われる。

◆ 文学部比較文化学科 前期日程（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

問題Ⅰ

英語の語彙力、英語の基礎的な文法や構文の知識を問うと同時に、英文の読解力と、日本語の文を正確に記述する能力を問う問題を出題した。

- 問1 英文の読解力と、日本語の記述能力を問うた。
- 問2 前後の文脈を踏まえた上で英文和訳を行う能力を問うた。
- 問3 英文の読解力と単語力を問うた。
- 問4 長めの英文を訳させることにより、日本語の記述能力も問うた。
- 問5 長めの英文を訳させることにより、日本語の記述能力も問うた。
- 問6 英文の読解力と単語力を問うた。
- 問7 前後の文脈を踏まえた上で英文和訳を行う能力を問うた。
- 問8 仮定法に関する知識を問うた。

問題Ⅱ

日本語の読解能力と、英文を正確に記述する能力を問う問題を出題した。

問題Ⅲ 現代文（理論的文章）

日本近代小説論の中から、小説の語り手について論じた文章を選択した。文中には、日本文学史上の様々な作品と作者名、文学用語などが頻出している。「授業で耳にしたことはある」程度の言葉が頻出する文章を、根気強く読む力も要求される。

問一 「こうした伝統」が指し示す具体的内容について説明する問題。「こうした伝統」とは、「旧来の文学伝統」であることを押さえた上で、そこに見られる「作中の語り手の介入」の具体的様相を記述する必要がある。傍線部（A）以降で展開される論の大前提となる導入部分の理解を問う設問である。

問二 筆者が述べる「近代固有の表現形態」についての理解を問う問題。傍線部（B）を含む長い一文の主語が、「『小説家』を主人公にする、というやり方」であることに気づき、要求された文字数でまとめるために、「日本の散文芸術固有の問題意識」までを踏まえた、丁寧な答案作りができるか否かを問うた。

問題Ⅳ 現代文（国語表現）

- 問一 漢字の書き取り問題。日常的によく用いる漢字を正確に書くことができるかを問うた。
- 問二 小論文など客観的な文章でよく用いる言葉を、適切に使うことができるかを問うた。
- 問三 評論等でよく用いられる、分かっているようで厳密には分かっていないことの多いと思われる言葉の意味を問うた。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ 英文読解

問1 下線部直後の部分から説明のポイントをうまく抜き出している解答が多かった。その一方で単語の意

味を取り違えている解答も目立った。

問2 前半は概ね正しく訳せていたが、後半 **keep** を「保つ」と訳したために意味が通らなくなった解答が案外多かった。

問3 正解率は三割程度と、かなり低かった。

問4 **undermine** の意味を正確に訳せている受験者は 10%ほどだった。**effort** を **effect** の意味で訳している誤答も目についた。

問5 和訳の問題で、“or”という接続詞がひとつの名詞句の内部で理解されるケースであるのに、文を接続するレベルに誤解しているケースが多かった。

問6 正答率はかなり高かった。誤答に関して、特定の傾向は見られなかった。

問7 全般的によくできていたが、基礎的な単語を誤訳しているケースが散見された。

問8 よくできていたが、仮定法を正しく訳せていない答案も散見された。

問題Ⅱ 英作文

比較的良好にできているものが多かった。動詞の他動詞と自動詞の使い方が理解できていないものが目立った。日本語の意味を自分なりにかみくだいて、訳を工夫しているものを高く評価した。

問題Ⅲ 現代文（理論的文章）

問一 語り手が語り手と語られる物語との関係それ自体を表白する点をおさえるなど、全体的によく捉えられていたと思われる。

問二 主人公を「小説家」に設定することにより、叙述に潜在する「私」（語り手）はどうなるのか、という点にまで踏み込めた答案は少なかった。140字を埋めるためであろうか、同じ内容を言葉をかえて繰り返し述べた答案が多く見られた。

問題Ⅳ 現代文（国語表現）

問一 正解率は軒並み低かった。「衰退」などの基本的な漢字が書けていないものが多かった。また、点画のはっきりしない乱雑な文字が目立った。

問二 「深く言及」など「言及」の意味を「追求」と混同した答案や「～を言及」という文法的誤りが多かった。

問三 イデオロギーの意味を「コモンセンス（常識）」や「ネイチャー（特性）」と誤解した答案が多かった。

◆ 文学部人間関係学科 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

英文を含む複数の課題文を読み、それらを総合してより多面的な理解ができるかをみることを目的としている。今年度は環境と人間の関わりをテーマとした三編の課題文を提示した。

【課題文 1】では、環境と人間の関わりのうち、情緒的な繋がりをトポフィリアと呼び、その特性について幾つかの視点から考察している。【課題文 2】では、環境と人間の関わりには積み重ねられた空間の経歴があり、それを空間の履歴と呼んでいる。空間の履歴の積み重ねによって、それに関わった人びとにとって切り離しがたい空間の価値が生まれると論じている。【課題文 3】は、広島県福山市鞆の浦の景観訴訟に関する社説である。鞆の浦では、道路の渋滞を解消するために湾を埋め立てて道路を作る計画が 83 年に立案され

た。それに対し、市民グループが歴史的価値のある鞆の浦の景観を保全するために道路計画の撤回を求めて訴訟をおこしたが、2016年2月15日、県が埋立許可申請を取り下げ原告は訴えを取り下げることにより、9年間続いた訴訟が終結し、景観は保全されることとなった。

問1、2は文章の理解力を試すことを目的としている。問3の小論文では、【課題文1】と【課題文2】を読み環境と人間の関わりを理解した上で、その知見をもとに鞆の浦の事例について、自分の考えを論述することを求めている。【課題文1】と【課題文2】で理解した環境と人間の関わりについての知見とそれを考察する方法が、【課題文3】の事例に対して応用できるかどうか、自分の考えが他者に十分伝わる文章が書けるかどうかを試されると考えている。

<答案の特徴と傾向>

問1

部分的な読み取りはできているものの、「トポフィリア」の示す「物質的環境と人間との情緒的なつながり」についての訳ができていない解答が見られた（環境への人間の影響など）。また、「トポフィリア」の範囲・対象を限定的に捉えているものも多かった。英文全体にある感情・情緒に関する記述に言及し、説明することが求められる問いであった。

問2

「空間の履歴」と「空間の価値」の2つの言葉を説明することを求めているが、両者を総合して説明することが望ましいと考えている。このような答案も多くはないが一定程度見られ、すぐれた読解力をもつ受験生がいることは収穫であったと考えている。

問3

キーワードを十分に説明せずに用いているため、論が不明瞭な答案が見られた。とりわけ、「トポフィリア」というキーワードは、使ってはいるが意味を取り違えているものも多く、英文をきちんと読まずに解答しているのではないかと思われる答案もあった。

自然環境と人が作り上げた歴史的な景観の違いについての視点に立つ考察がほしかった。

また論理構成が適切とは言えない答案があり、思いついた順に話を並べ解答しているように見受けられた。指定した文字数を十分に満たしていない解答も少なくない。文字が雑に書かれて読み難い答案もあるので、解答は丁寧に記述してほしい。

◆ 文学部比較文化学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問1

長文を読解する能力と、そこから必要な情報を選び出してまとめる力を問うている。この間に答えるためには、問題文全体を的確に把握している必要がある。問題文の前半に、富士山という名所の描き方の定型化が、その『見型』を規定していく」とあり、問題文の中頃には、富士山という名所の画像が、現実の視覚像さえ変えてしまうほどに理想化されてゆくプロセスを述べた一文がある。また、問題文の後半には、「この歌枕もやはり『見方』の型、言語による『見型』として作用する」とあり、その少し先には、歌枕における名所の定型化・理想化のプロセスが述べられている。問題文の末尾には、「名所の絵が記号的な表現で済む」理

由が述べられ、さらには、「文化に特有の『見型』』とは何か、「型」とは何かを明記した部分も存在する。

問題文の多くの部分を占める様々な具体例に翻弄されずに、それらの具体例を基に筆者が何を述べようとしているのかを的確に理解していることを、読み手にきちんと伝わるようにまとめる力を求めている。

問2

これまでの体験や経験の中から、該当する適切な事例を選び出し、論理的に文章でまとめる力を問うている。いわゆる伝統的な名所にこだわる必要はない。問題文の後半に「名所とは、＜中略＞現実の地でありながら、それ以上に人々の共有するイメージそのものの時空の中の形成される、心象としての『場所』である」と記されていることに気づき、自分自身の経験の中から該当する事例を見つけ出して論述することを期待した問である。

例えば、家族や友人等と訪れた場所の景観が、その時の思い出やその時の季節・時刻・天候などと結び付いて記憶されており、その場所の名を聞くと、その時の情景が思い出されるという経験は誰もがしているだろう。或いは、強く印象に残っている物語や小説・映画などの舞台が実在する場所である場合、その景観を現実通りではなく、作品世界に描写されているように記憶しており、そこは実在の場所でありながら作品世界の一部とも感じるという人もいるだろう。そのような自分自身の体験を、この間に結び付ける発想力と、自分の考えを論理的かつ具体的に論述する力を求めている。

<答案の特徴と傾向>

問1

筆者の述べる「見型」とは何かが問われているにもかかわらず、「見型」とはどのようなものかが最終的に答えられていない答案が少なからずあった。名所の絵と歌枕との両方に触れるという点は、どの答案もクリアできていた。しかしながら、「見型」が人々によって共有されたイメージであるといった点はおさえられているものの、名所の絵についての特徴と、歌枕についての特徴は、それぞれ十分に明らかにされていなかったように思われる。

問2

発想力を問う問題。身近な自分の事例をとりあげられるかどうかはポイントのひとつ。そして、それがなぜ「名所」であるのかを論理的かつ説得力をもって記せるかが二つ目のポイントである。なぜわたしがそのように考えるのかということが自分の言葉で書かれていない答案も多かった。

◆ 文学部人間関係学科 後期日程（集団討論）

<面接の意図・ねらい>

後期日程の試験は、数人の受験生による与えられた討論テーマに基づいての集団討論である。テーマを設定した討論場面において、自分自身の見解をテーマに沿って論理的・独創的に表現できる力、情報提供や意見調整など円滑なコミュニケーションを進める力、集団の中で適切なかたちでリーダーシップを発揮していける力などを見ていきたいと考える。なお、討論テーマはあくまでも討論のために設定されたもので、それ以上の意図をもつものではない。

<受験生の特徴と傾向>

集団討論では、顔の見える関係、お互い様の関係の喪失が議論のポイントであり、その点を理解して発言している受験生もいたが、ポイントがずれた意見も少なくなかった。課題についての掘り下げがあまりなく、現象についての理解にとどまってしまうたり、課題に沿って議論を深め合う姿勢が不足したりしている受験生がいた。司会を申し出た受験生にやや影響される者、発言が形式化、マニュアル化している者もいた一方で、原因についてのさまざまな意見や、具体的な解決策が出るなど発展的に議論が進み、活発な討論も見られた。

◆ 法学部 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

（１）出題文選択の背景

グローバル化の波は、現代社会のあらゆる場面に押し寄せており、日本社会もその例外ではない。その最たる例が、近時の英語化推進政策であろう。実際に、一部の企業では英語の社内公用語化が実施され、大学レベルにおいても、英語での講義や留学を中心としたプログラムの強化や学部の新設が続いている。もっとも、去年は、イギリスの欧州連合からの離脱の決定（Brexit）に始まり、アメリカでは自国優先主義を公言する保守派の大統領が選出されるなど、グローバル化の潮流それ自体に大きな疑問符をつける出来事が相次いでみられた。日本社会の英語化についても、当初から賛否が大きく分かれており、目下社会の関心を集めている政策の一つといえよう。

そのような状況にあって、本年度の一般前期試験では、日本社会の英語化を政治学の観点から批判し問い直そうとする、施光恒『英語化は愚民化—日本の国力が地に落ちる』（集英社新書・2015年）の一部を、課題文として取り上げた。ここで、筆者は、日本国内での英語化政策の推進により、日本語が衰退して「国語」の地位を失って単なる「現地語」に転落する危険性について論じている。その背景として、筆者が特に問題視しているのが、「グローバル化史観」である。すなわち、「ボーダレス化やグローバル化こそ『時代の流れ』（趨勢）であり、進歩である」とする見方を、「非常に一面的な歴史の捉え方」であるとして、これに警鐘を鳴らしている。そして、グローバル化が想定する普遍化のプロセスは、実は「普遍から土着へ」の過程の中で生まれたヨーロッパの近代社会の成り立ちと相反していることが指摘されている。とりわけ、筆者は、土着語である日本語を単に普遍語である英語に置き換えることが、公的議論や知的世界への一般市民の参加を困難にし、ひいては民主主義社会の基盤そのものを破壊する危険性について示唆しており、本問ではこの点に注目した。

大学入試センターでのリスニング試験の実施など、英語化推進政策は、まさに受験生自身が直面している最新の社会的動向といえよう。「グローバル化への対応」、「英語化への対応」は、昨今の社会情勢からは一見すると抗いがたい現実のように思われる。しかしながら、受験生には、そのような現実と結びついた政策についてもなお、「民主主義」という法学・政治学を支える基本原理からその妥当性を問い直してもらいたい。それが、本問の出題のねらいである。

（２）受験生に何を望むか

まず、本問における問題の所在を明らかにするために、①筆者が投げかける疑問とその根拠を適切にまとめる力が求められる。その上で、筆者の主張のうち特に、②英語化推進政策と民主主義社会や国民の政治参加との関連性について述べた部分を前提にして、前者が後者に与える影響について、自らの言葉で、論理的・

説得的に論述することが求められる。

<答案の特徴と傾向>

設問の前半部、すなわち課題文を読んで「グローバル化＝英語化史観」について筆者が指摘する問題点をまとめる部分に関しては、例年と比較して、課題文の内容や筆者の意図を適切に読み取った上でまとめることのできていた答案が多かった。

設問の後半部、すなわち、以上のまとめを踏まえて英語化推進政策が民主主義社会に与える影響について自分の考えを述べる部分に関しては、設問が、英語化推進政策が「民主主義社会に与える影響」についての考えを述べることを求めているにもかかわらず、それに対して適切に解答されていない答案が多く見られた。例えば、英語化推進政策が経済格差や教育格差を拡大することに関する自説を展開するもの、英語化推進政策により日本の伝統や文化が失われるとするものなどである。中には、「民主主義」というキーワードを使いながらも上記のような論を展開する答案も見られたが、この場合は、「民主主義」という概念を適切に理解しないまま論述してしまったのではないかと考えられる。また、強引に自分の身の回りの事象に引き寄せすぎて適切な解答となっていない答案も散見された。

それに対して、民主主義社会のあり方と関連づけて適切に解答されていた答案には、筆者の主張へのスタンスがどのようなものであったとしても、高い評価を与えた。

ところで、先述したような「設問に適切に解答していない答案」を書いてしまうことを避けるために、課題文を読み終わった後で再度設問を読み直し、何が問われているかを確認してから答案を作成するようにしてほしい。また関連して、設問の前半部への解答と後半部への解答の分量のバランスが極端に偏っている答案や、答案用紙をかなり余らせて終わっている答案も散見されたが、何をどの程度書くかなど論文の全体構成を考えてから解答用紙に書き始めるよう心掛けてもらいたい。

◆ 法学部 後期日程（面接）

<面接の意図・ねらい>

法学部では、一般選抜後期日程において、面接による選抜試験を実施している。面接を実施している理由は、単にセンター試験の成績のみで入学者を選抜するのではなく、対話形式により社会的問題関心などを問うことにより、勉学の意欲と幅広い素養を持った学生を選抜するためである。したがって、面接にあたっては、①法学部学生として必要とされる社会に関する基礎的知識と問題関心、②社会的問題に対する論理的思考力および多角的検討能力、③プレゼンテーションおよびコミュニケーション能力、④受験生の入学意欲や将来設計を含む志望動機などを中心として評価している。

<受験生の特徴と傾向>

面接試験では3問を出題した。第1問は、本学法学部法律学科または政策科学科を志望した理由および法学部入学後どのようなことを学びたいかを問うものである。全体的な傾向としては、本法学部ホームページ等で容易に知ることのできるキーワードを織り込んだ抽象的な回答や、公務員志望なので法学部を選択したなど、学びの内容に言及のない回答が目立った。それに対して、なぜ「法律学科」あるいは「政策科学科」なのか、進路希望と法学部での学習内容がどのように関連しているのか、どのような専門分野を学びたいのかといった点について具体性のある回答に対しては、高い評価を行った。

第2問は、日本社会における労働力不足を解消する手段としてロボットを積極的に開発・利用することが、

社会にどのような影響を与えるかを問うものである。回答の前提となる、日本社会における生産年齢人口の減少や人工知能を含むロボット技術の開発の進展等に対する知識・関心の有無によって、大きく差が開く結果となった。スムーズに的確な回答を行う受験生がいる一方で、質問者が補足的説明を加えてもそれを受けて話を展開できない受験生も見られた。また、自分の考えと異なる立場を想定してのやり取りの中で、自説が矛盾を来してしまうなど、全体的に論理力に欠ける回答が目立った。難しいこととは思うが、異なる立場を想定して、客観的論拠に基づき、双方の論理性・説得性を検討するといった訓練に取り組んでもらいたい。

第3問は、関心を持った社会的事件・出来事を問うものである。ローカルな話題から国際的ニュースまで幅広いテーマがあがったが、全体的には「ごく最近の」出来事を取り上げる受験生が多かった。その後のやり取りを通して、当該事件・出来事について表面的に知っているだけなのか十分な知識・関心を有しているのか、またその事件・出来事の背景にある社会的問題を捉えることができているかどうか、社会的意義づけができているかどうかによって、差が開く結果となった。普段から社会や政治経済への関心と知識を広げ、出来事そのものの問題性のみならず、背景にある社会的問題との関連性を捉えることができるように意識してもらいたい。

◆ 地域創生学群 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

今回の試験の出題文は、これまでの一般選抜の小論文試験と同様に、地域の再生と創造（地域創生）を担う人材に求められることに関連した文章の中から、次の3点を念頭に置きながら選定をしました。1点目は地域創生やまちづくりを考える上で重要な人材のあり方に関連した文章であること、2点目は地域創生学群において学生に育てたいと考えている能力に関連した文章であること、3点目は一般選抜であることを考慮し、一般的かつ平易な文章であることす。複数の候補を検討した結果、金子郁容（1992）『ボランティア—もうひとつの情報社会』岩波書店、の該当箇所が、今から25年前の文献であるにも関わらず現在においても重要な示唆を含む内容であると考え、上記選定基準に鑑みて最も適当であると判断し、出題文として選定させていただきました。

今回の設問では、「相互依存性のタペストリー」という状況下でボランティアを行うと、「自発性パラドックス」が起こるという著者の指摘について、本文からその理由を述べるというものでした。また、当然ですが、論理的思考能力や説得力は解答文全体を通じて評価される設問にもなっています。

<答案の特徴と傾向>

ポイントとしては、「相互依存性のタペストリー」という言葉の意味について理解しているのか、そして「自発性パラドックス」が起きる2つの状況のうち、「相互依存性のタペストリー」に関連する方の状況を理解しているのかという点を中心にして、「自発性パラドックス」が起きる理由について、論理的に著者の考えを丁寧にまとめることができているのかを評価点としました。

答案の傾向としては、「相互依存性のタペストリー」、「自発性パラドックス」の語句説明に終始していたり、あるいは設問では「理由」を述べることを求めているにも関わらず、全く述べられていない答案も見られました。一方で、設問のポイントをしっかりと理解し、論理展開もしっかりとした上で、簡潔に内容をまとめ、下書きを丁寧にした上でまとめられたであろう大変すばらしい答案もありました。このような答案には高い得点がつきました。

最後に、例年と違い、受験生の意見を求めている設問であるという出題の意図が十分理解されており、

自分の主張を述べた答案や、自分の地域の活動の紹介など、出題文とほとんど関係の無いような事柄について述べている答案は見られませんでした。

<面接のポイント>

一般選抜の試験の面接試験であるということを踏まえ、ディスカッションするために必要な知識、コミュニケーション能力について評価をさせていただきました。特に今回は資料を読み込んでいただき、それについてディスカッションをすることを求めています。「意見をまとめる」ためのディスカッションをしたり、あるいは指示に無いにもかかわらず「発表の準備」をしようとしてディスカッションが不十分なグループもありました。指示された課題の意図は何か、今、何をしなければならないのかを考え、その課題に対して精一杯取り組む姿勢を大事にさせていただきたいです。また、今回の課題では、地域創生学群で学ぶ学生として必要な社会情勢など社会への関心を、しっかりと持っているのかという点についても評価させていただきました。

◆ 国際環境工学部 前期日程（理科・数学）

理科（物理・化学・生物）

<出題の意図・ねらい>

【第1問～第3問 物理】

第1問

力学で基礎となる現象である摩擦やばねの働きを問う問題である。それら同士や加速度、速度との関係も含めることで、個々の現象だけでなく全体について考えることができるかを問う問題である。

第2問

熱力学の問題である。最初のときのシリンダー内の圧力と、ピストンが移動した場合の内部エネルギーの変化を尋ね、熱力学の基本的な考え方を理解しているかを問う問題である。

第3問

直流回路に関する基礎問題である。キルヒホッフの法則を正しく適用できるか、合成抵抗を正確に計算できるかを問う問題である。

【第4問～第6問 化学】

第4問

水溶液の濃度を決定するための中和滴定で使用する器具や試薬に関する基礎知識を問うとともに、中和反応における定量的な計算力を問う出題である。化学で基本となる物質量を計算する能力、および酸・塩基反応についての理解度を確認することを目的としている。

第5問

金属材料として代表的なアルミニウムを取り上げ、元素としての性質や、鉱石からの製造法などの基礎的な知識を問うとともに、電気化学反応や酸化還元反応における電子と物質の量的関係を正確に把握する能力を問う出題である。金属元素や酸化還元反応などの無機化学に関する理解度を確認することを目的としている。

第6問

有機化学の問題である。前半は、有機化合物の元素分析に用いられる実験装置や薬品の理解度を問うて

いる。後半は、元素分析の結果といくつかの化学的な性質から、有機化合物の構造を推定する論理的思考力を問うている。有機化合物に関する基礎知識を活用して論理的に構造を導き出す問題は、本学のこれまでの入学試験でも繰り返し出題されており、必ず理解しておくべき問題である。

【第7問～第8問 生物】

第7問

問1は光合成、問2は生存率の変化、問3は進化の機構に関する出題で、いずれも教科書に記述されている標準的な知識を問う問題として出題した。教科書の内容をよく理解しているかどうかを試す意図での出題であるが、問2、問3では記述問題を出題し、断片的な知識だけではなく、総合的に正しく理解しているかどうかを試した。

第8問

遺伝子の形質発現の機構に関する標準的な知識を問う問題として出題した。転写と翻訳の過程が原核生物と真核生物とでどのような違いがあるか、DNAが複製される際の機構、遺伝的多様性が生物にとってどのような意義があるのか、など基本的な内容について、記述問題を中心に正しい知識を得ているかどうかを試した。

<答案の特徴と傾向>

【第1問～第3問 物理】

第1問

全体的に、力学現象をよく理解しており、それらの組み合わせについてもきちんと考えることができた答案が多かった。しかしながら、解答を正確に、注意深く記述できていない答案も散見された。

第2問

初期状態における気体の圧力を尋ねる問題はほとんどが解答できていた。ピストンが移動する場合、左右のシリンダー内の圧力が同じであることと、片方のシリンダー内の温度の変化がないことを条件に解くのであるが、この現象に対する理解が不十分な解答も見られた。内部エネルギーの変化に関しても、同様なケースが見られた。

第3問

平均点は低く、特に、ネ、ノ、ハの正解率が低かった。キルヒホッフの法則を適用できていない答案が多く見られ、計算間違いと思われる解答も少なくなかった。

【第4問～第6問 化学】

第4問

問1～3の基礎的な問題については、正答率が高かった。問4は、中和滴定における酸または塩基の定量計算を行う基礎的なものであったが、全問正解の答案は少なかった。これは滴定操作の理解が不十分であったことによるものと思われる。問題文を落ち着いて正しく読み取り、正確性に注意して計算すれば難しい問題ではない。また、指示された有効数字を意識していない答案も多く見られたのは残念であった。

第5問

問1の正答率は高かったが、オに適する用語として物質名を答えている答案が散見された。ここで問われているのは状態である。問題文をよく読み、適切な用語を解答して欲しい。また、漢字の誤記も目立った。

問2および問4の化学反応式を答える問題では、左辺と右辺で量的関係が合わない答案が多かった。化学反応式の基本は両辺の原子の数を等しくすることであり、注意して量論係数を合わせてほしい。

問3および問5では、立式までは正しいにも関わらず、単純に計算を間違えてしまった答案が見受けられた。また、化学反応式の量論係数を考慮せず計算する軽率な間違いも目立った。化学式の量的関係に基づいた正確な計算力が望まれる。

第6問

問題文中にも書かれているように、元素分析装置では有機化合物の試料を完全燃焼させる。したがって、問1の流通させる気体Aは、完全燃焼させるために必要な気体でなければならない。正答率は予想以上に低かった。水だけを吸収する物質Bに関しても、誤答が多かった。

問3(1)の質量組成の問題では、炭素、水素、酸素のモル比を分数で求めると、容易に正答にたどり着ける。しかし、最初に小数に近似し、四捨五入してしまったために誤答となった答案が多かった。この間違いは、次の問3(2)の情報を考慮すれば回避できたはずである。

問4では、化合物DとIの正答率が高かった。化合物Eを第一級アルコールとする誤答が多かった。これは、アルコールの分子内脱水反応についての理解が足りないためと思われる。

【第7問～第8問 生物】

第7問

空欄補充や用語を答える問題は正解が多かったが、完答はわずかであった。また、文章記述問題では、正解に近い解答は多かったが、完全に正しく答えられたものはわずかであった。問2(1)では、それぞれの型を説明するところまではできているが、比較しながら述べられていない答案が目立った。問2(3)の生物名を答える問題は正答率が低かったが、いずれも教科書に出ている典型的な生物で、実際の生物の特性と生存率の変化を結びつけることで正しい理解が得られるため、事例を含めて知識を深めておきたい。

第8問

問1(1)の転写・翻訳の過程の模式図に関する問題は正答率が高かったが、(2)の生物名に関しては完答が少なかった。選択肢には、いずれも代表的な原核生物と真核生物の名称が挙げられているので、生物名に関する知識を深めておきたい。記述問題に関しては、うまく説明できていない答案や、誤解を招くような答案が目立った。部分的な知識では文章記述問題の完答は難しいので、全体を正しく理解する必要がある。そのためには繰り返し教科書を読むことが必要であろう。

数 学

<出題の意図・ねらい>

第1問

数学Ⅰ、数学Aに関する基礎学力を確認する。実数、絶対値、不等式、二次関数、余弦定理、図形の面積、組合せ、条件つき確率について出題している。

第2問

数学Ⅱ、数学Bに関する基礎学力を確認する。高次方程式、点と直線、円の方程式、三角関数、対数関数、指数関数、数列について出題している。

第3問

媒介変数を用いた曲線に対する面積、および回転体の体積を問う基本的な問題である。

問1 面積を問う基本的な問題である。媒介変数を用いた場合の積分ができれば、容易に解ける問題である。

問2 媒介変数による座標計算であり、積分の知識が無くても求めることは可能である。

問3 回転体の体積を求めるものであり、問1や問2と比べて、若干レベルが上がっているが、教科書の例題レベルを越えていない。

第4問

平面上の曲線に関する問題。楕円の接線について理解できているか確認している。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1 自ら方程式を立てることが求められる問題である。諦めたかのような誤答が散見された。

問2 絶対値および不等式の問題である。「 x の2乗」を「 x の絶対値の2乗」に置き換えらえることに気付けば、比較的簡単な計算で正答に至る。 x の正負で場合分けをし、計算を難しくしたことでミスしてしまった誤答が散見された。

問3 余弦定理を用いて三角形の面積を求める問題である。やや計算が面倒であるが、正答率は高かった。頻出問題であるため、多くの受験生が対策をしていたと考えられる。

問4 場合の数に関する問題の応用である。教科書等にあまりみられない問題文であるが、本質的には「それぞれに2、3、3、5、11が記された5つの球をA、B、Cの3つの箱に入れる組み合わせは〇〇〇通りである。ただし、球が入らない箱があってもよい。」等と同義である。正答率は約1%であった。受験生には応用力を養って欲しい。

問5 確率に関する基礎的な問題である。確率を扱う問題は、例年、正答率が低い。読解力をつけることが必要だと考えられる。

第2問

直線に対して対称となる点を求める問題に対し、対称の意味を理解していないと思われる解答が見られた。基本的な例題についてはよく勉強してほしい。

虚数単位 i には根号が含まれていることに注意したい。また、解答は丁寧に書くよう心掛けてほしい。

第3問

媒介変数表記を用いた関数の面積、および、回転体の体積を求める基本的な問題である。まず、全般的に、媒介変数に対する理解度が低いために、正解に至る解答が少なかった。受験生には、きちんとした準備を強く求めたい。また、記述式問題に対し、解答を導出した道筋を論理的に記述する訓練も不足しているように思われる。なぜそのような解答になったのかを過不足無く答えられるようになることを強く望むものである。

問1 面積を求める問題である。まず、媒介変数のある積分の求め方を理解できていない解答が相当数存在した。 $0 \leq \theta \leq 2\pi$ であることと $0 \leq x \leq 2\pi$ であることを混同している解答も多数存在した。

問2 媒介変数の値に相当する変数の値を求める問題である。これは正解率は高かったが、なかには、三角関数の値を間違えている解答もあった。また、座標として、 (θ, x) のような組み合わせで解答している解答も少なからずあった。

問3 回転体の体積を求める問題である。 x 軸のまわりで回転したときの体積を表す積分の式を立式できていない解答があった。

第4問

問1 平面上の曲線である楕円とその接線に関する基本的な問題である。接線の傾きを m とした接線の式を楕円の式に代入して得られる x に関する2次方程式が重解をもつことを利用すれば解くことができる。題意を全く理解できていない解答が多かった。(2)では、式の変形でミスをした解答が多かった。

問2 問1の接線の方程式が正しく得られれば、その x 軸、 y 軸との交点から面積が求められる。交点の座標が正しく得られず、不正解となった答案が多かった。

問3 解答していない答案が多かった。

◆ 国際環境工学部 後期日程 (数学)

■機械システム工学科 (第3問必修、第4問選択A、Bの中から1問選択)

■情報メディア工学科 (選択)

■環境生命工学科 (選択)

<出題の意図・ねらい>

第1問 (第4問 選択A)

二次方程式、二次不等式、確率、図形、集合に関する基礎的な知識と演算能力を問う問題である。いずれも基礎能力の確認を狙っており、限られた時間でも正確に計算し、解答することを期待した。

第2問 (第4問 選択B)

ベクトルと図形に関する設問である。高度な知識や発想を問う問題ではなく、ベクトルの演算や分点、ベクトル方程式に関する基本的な知識と論理的な思考力を確認する問題である。

第3問 (第3問 必須)

楕円関数に関連して、定積分を使って面積を計算させ、微分積分の基礎知識と計算力を確認する問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問 (第4問 選択A)

基本的な知識と計算力を問う問題のため、正解率の高い小問もあったが、満点は少なかった。集合に関する設問は平易であるにもかかわらず、正解率は低かった。二次不等式、二次方程式の正答率が比較的高かった。

第2問 (第4問 選択B)

ベクトルに関する基本的な知識と演算力、思考力を確認する問題であり、正答率は比較的高かった。しかし、解答を導き出す過程を正確に記述できていない答案や単純な計算ミスも散見された。

第3問 (第3問 必須)

小問1は、楕円の外側を動く点の軌跡(円の第一象限の軌跡)を求める問題である。受験生の答案では、円の軌跡まで導いたものの、第一象限の指定(点の軌跡に必要な「どこを動くか?」の情報)が無いものが多かった。小問2では、楕円上を動く点の軌跡の媒介変数表示を求める問題であるが、正答率は高かった。小問3では楕円に内接する六角形の最大となる条件を微分によって求める問題である。小問1、小問2に比べ、正答率は低かった。導関数の符号の変化に関する議論が不足している答案が多く見られた。小問4では、小問3の条件の下で、指定された領域の面積を積分で求める問題である。変数変換、積分計算等のミスが多く、最終的な答えを導いた答案は少なかった。

◆ 国際環境工学部 後期日程（物理）

- 機械システム工学科（第1問、第2問）
- 情報メディア工学科（選択）
- 環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

力学の基本である、物体の等加速度運動・衝突についてきちんと考察・計算できるかを見る問題である。

第2問

熱力学第一法則、内部エネルギーおよび気体の法則などの熱とエネルギーに関する基礎知識を理解できていることを確認する問題である。

第3問

前半はコンデンサーを含む直流回路の基礎問題、後半は電磁誘導の基礎問題。直流回路におけるコンデンサーの働きを理解しているか、電磁誘導の法則を理解しているかを問う問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問

単純な等加速度運動のみ、および単純な衝突のみ、については高い正答率であったが、それらの組み合わせについて正確に考察できているものは比較的少なめであった。

第2問

前半は熱の定積変化、定圧変化に関する基礎知識を理解できていれば、容易に正答できる基本的な問題であり、正答率も高かった。後半は、エネルギーに関する基礎知識のほかに熱効率に関する知識を必要とする問題であったため、正答率は前半よりもかなり低かった。

第3問

平均点は低く、とくに、ネ、ノ、ホの正解率が低かった。問題を注意深く読んでないと思われる答案が多かった。また、電磁誘導の法則を全く理解していない答案も散見された。

◆ 国際環境工学部 後期日程（化学）

- エネルギー循環化学科
- 環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

化学結合、熱力学方程式、濃度計算の基礎的な問題である。問1は金属結合、イオン結合および共有結合などの意味を理解していれば解答できる問題である。問2は結晶構造とその幾何学的思考ができていることを確認する問題である。問3はイオン化エネルギーと電子親和力および熱化学方程式を組み合わせた問題で少し難易度が高いようにみえるが、熱化学方程式を理解していれば容易に解答できる。問4は濃度の計算方

法と中和の極めて基礎的な学力を問うている。

第2問

基礎化学製品の工業的製法に関する基礎知識、ならびにその過程で重要となる触媒、平衡および原子の酸化数に関する基礎学力を問う問題である。

第3問

有機化合物の異性体の構造決定を主題とした若干難易度の高い問題である。アルコールの酸化、脱水、水素付加などの一連の反応から化合物の構造を論理的に導き出す思考力・推察力と、アルコールからのエステル合成に関する基礎知識を問うことを意図している。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1のような、語句を問う問題は比較的正確率が高いが、計算問題になると問4のような基礎的な問題でも正解している解答が非常に少なかった。計算問題の過程を示すように問題文に指示しているのに、それに従っていない場合や有効数字、単位を間違っている解答が多かった。これらを含めた、基礎的な問題を正確に解答できる学力を身につけてほしい。

第2問

問1は、基礎化学製品の工業的製法の名称を問うものであり、概ね正確率は高かった。問2では、アンモニアおよび硝酸の製造に利用される化学反応の反応式を正確に記述できるかどうかの問題であり、量論係数や分子式に正確性を欠いた答案が目立った。問3では、「触媒」という名称は大多数が正解していたが、具体的な物質名と反応式については、曖昧な記憶による誤答が目立った。問4は、平衡移動を問う問題であり、比較的良くできていたが、問われたことに適切に応えていない解答もかなりあった。問5は不完全な解答が大多数であり、気体反応における物質の変化と気体組成の関係が理解できていないようである。問6は平易な問題であり、問2ができていない場合でも正解している解答も数多くあった。

第3問

問1はアルコール異性体の構造式を決定する問題であり、説明文の内容を的確に理解していないと解答できない点があり、正確率は30%くらいであった。問2は、問1の続きでアルコールの構造と酸化反応との関連性を問う問題であり、問1とほぼ同じく正確率が30%くらいであった。問3と4はアルコールの脱水反応によって得られたアルケンの構造異性体とそれらの水素付加反応の生成物を予測する問題であり、正確率は中程度であった。問5は説明文中に与えたヒントのアルコール分子と酢酸とのエステル化反応を問う基礎問題であり、比較的、正確率が高かった。

◆ 国際環境工学部 後期日程 (生物)

■ 環境生命工学科 (選択)

<出題の意図・ねらい>

第1問

DNA とタンパク質の構造、および形質発現についての基本的な知識を問う問題として出題した。

第2問

問1はヒトの染色体構成、減数分裂、配偶子形成について、問2は動物の行動に関する基礎的な内容について、おもに図や文章で説明する力を試す問題として出題した。

第3問

問1は生物の個体群について、問2は湖沼生態系について、おもに文章で説明する力を試す問題として出題した。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1は必須の内容であり、正解率は高かった。問2は基本的な内容について説明する問題であり、正しく説明できている答案が多かった。問3は基本的ではあるが、コドンの数とアミノ酸の種類の数の違いを説明するだけの答案が目立った。問4は部分的には正しい答案が多かったが、完答はほとんどなかった。問5に関しては、構造式として正確に書いている答案は少なかった。問6はタンパク質の構造についての基礎的な問題であるが、一次構造から四次構造までの違いを一貫して正しく説明した答案は少なかった。

第2問

問1(1)の空欄補充問題は正解率が高かったが、(2)の減数分裂の過程を図と文章で説明する問題は正解が少なかった。減数分裂の過程は必須の内容であるが、全体の過程を正しく覚えておかないと図や文章で表現する問題では得点できない。図のみで説明文がない答案も目立った。(3)の精子と卵の形成過程の違いに関する問題は、おおまかには内容を理解しているが、両者を比較して正確に解答できている答案は多くはなかった。問2の(1)は反射に関する記述問題で、受容器→感覚神経→脊髄→運動神経→効果器という反射弓の全経路を記述することが必要であるが、このうちの3～4つの過程でとどまっている答案が多かった。(2)は古典的条件付けという学習について説明する問題であったが、条件刺激と無条件刺激とを逆にしている答案が多かった。

第3問

問1は、(1)の空欄補充は完答が多かったが、(2)の標識再捕法が適用できる条件を問う問題では完答は少なかった。(3)の年齢構成に関する記述問題では、図に示されている相対値を絶対的な個体数と解釈して2つの個体群間の比較を述べた答案が目立った。図に示されているのは、個体群の中での各年齢階級に属する個体数の割合であり、実際の個体数が多いかどうかは示されていないことに注意したい。問2は、(1)では植物プランクトンが春に急増したのちに減少する過程をそれぞれ制限要因が変化することから説明する問題であり、図に示されたデータのみから説明できる問題で、完答やそれに近い解答が多かった。一方、(2)では、無機塩類が植物プランクトンの増殖の制限要因となっていることまでは図から読み取って解答できていたが、水温の季節変化から夏に成層し、冬に循環することを読み取り、ここから夏の成層期に無機塩類が制限要因となる理由を述べる必要があり、この部分は正解率が低かった。いずれも、筋道を立てて簡潔に説明する力をつけておきたい。

◆ 国際環境工学部 後期日程（面接）

■ 建築デザイン学科

<面接の意図・ねらい>

グループ面接および個別面接・口頭試問を行った。

グループ面接は受験生を4～5名程度のグループに分けて行った。

- ・中古住宅のリフォームと新築住宅の設計に関する問題
- ・他の受験生の意見

について質問し、回答を求めた。

個別面接・口頭試問では、

- ・自己PRおよびその内容
- ・「大学」に対するイメージ
- ・建物とスマートフォンを生産する上での違い

について質問し、回答を求めた。

これらの質問を通じて受験生の思考力および意欲などを確認した。

<受験生の特徴と傾向>

グループ面接

「中古住宅のリフォームをしたい」と「新築住宅の設計をしたい」と回答する学生は概ね同数であった。ディスカッションでは、多くの受験生が積極的に意見を述べていた。また、自分の意見を一方的に述べるのではなく、相手の意見をよく聞き、さらに理解したうえで、自らの意見を述べている学生が多くみられた。

個別面接・口頭試問

自らの考えを整理し、きちんと述べている受験生が多くみられる一方、出題では「生産する上での違い」を質問していたのであるが、単に「建物とスマートフォンの違い」について回答している受験生もみられた。

平成 29 年度入試の出題の意図、採点総評 《推薦入試》

◆ 外国語学部英米学科 推薦入試（全国：面接）（地域：小論文）

全国推薦（面接）

<面接の意図・ねらい>

英語で自分の考えや意見を表現することができ、スムーズなコミュニケーションを行なえる力を問う。

<受験生の特徴と傾向>

多くの学生が英語でコミュニケーションをとろうという積極性を持ち、難しい質問にも粘り強く答えようとする熱意を見せた。期待に十分に答える受験生が多かったと評価できる。

地域推薦（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題文は、日本に伝統的にある銭湯についての文章である。

問 1 は、本文の趣旨を理解した上で、内容を簡潔にまとめる問題である。

問 2 と問 3 は、英文和訳の問題である。英文を読むために必要な構文に関する理解を問うている。

問 4 は、質問に従いながら、自分なりの議論を論理的に構成する問題である。

<答案の特徴と傾向>

問 1 ほとんどの受験生が問題文の内容を理解できていた。ただし、内容をまとめる際の取舍選択の仕方での理解度の差が見られた。

問 2 基本的な英文構造を理解し、出来は悪くはなかった。

問 3 基本的な語彙の知識が欠如している点が気になった。

問 4 テキストの考え方や言い回しをそのままコピーするのではなく、論理的に英文を構成し、自分の意見を表現出来るか、問題の趣旨に従って記述しているか、等で大きな差があった。

◆ 外国語学部国際関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題文は、近年ニュースなどでも頻繁に取り上げられる人工知能（AI）と人間との共生をテーマにした英文資料であった。二つの資料は、雇用の観点から AI の発展が社会生活にどのような影響を与えるのかについて論じ、メリットとデメリットを紹介している。問 1 では、英文による筆者の主張を正確に読み取れているかどうかを確認した。問 2 は、二つの資料で述べられた内容を踏まえて、AI と人間との共存に必要な取り組みについて考察を求める問題であった。

<答案の特徴と傾向>

問1

資料1は平易な英文であったにもかかわらず、内容を正確に読み取れていない回答が多かった。趣旨はおおよそつかんでいるが、直訳のままで日本語として意味を成していない文章が多かった。また、誤訳も散見されており、英語力の問題と考えられる。

問2

①英文の資料1と設問がきちんと読めておらず、何が問われているのかを把握しないまま解答したものが多かった。特に、AIが雇用にもたらすメリット・デメリットが問われているにもかかわらず、AIのメリット・デメリット全般を解答した答案が多かった。また、資料を踏まえずに自分の意見を述べるにとどまった答案もみられた。

②資料1と資料2(和文)の双方に書かれている内容であれば答えられるが、資料1だけに書かれている内容には触れていない。これは資料を読みこなす英語力が不十分であった可能性が高い。

③解答の中で内容の重複が散見され、論理的な文章になっていない解答もあった。

◆ 経済学部 推薦入試 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

人工知能(AI)が昨今注目を浴びている。すでに、将棋の世界ではAIが人間を凌駕し、囲碁の世界でも人間に並び立った。このような趨勢は経済の領域にも確実に浸透してきている。問題文は、このようなAIの産業への適用に関して、世界がどのように対応しているのかを詳らかにしたものである。受験者がその意図を正確に読み解けるか、また、影響が甚大と思われる労働市場について、どのように受験者は予想し、それを論理的に記述できるかを問うた。

<答案の特徴と傾向>

設問1はインダストリー4.0に関して本文を要約するものである。そのため、見当違いの解答はほとんど見られなかった。しかし、余分な内容を解答に盛り込んだために、肝心の事柄が記述されていない答案が散見された。

設問2はインダストリー4.0に対する各国の取り組みを本文から読み取るものである。具体的な取り組みを記述すれば良いにもかかわらず、各国の経済の背景や、取り組みの影響など解答に必要な内容が無駄に記述されている答案が目立った。

設問3はAIが雇用を奪うのか、そうではないのかを本文に即してまとめた上で、自分の意見を論理的に展開できるかを問うた。まず、本文に即してまとめていない答案が目立った。筆者の考えをまとめた上で、自分の考えを展開してほしい。また、雇用を奪うという立場とそうではないという立場のいずれかに立っての論理展開を求めているにもかかわらず、解答中にその立場が揺れている答案も複数見られた。総じて、解答に必要で無い本文に着目して記述する傾向が見られた。

◆ 文学部比較文化学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題Ⅰ（英語）

日本に長く暮らすイギリス人ジャーナリストが、文化の差異にどう対処するべきかを考察した英文を出題した。英文の正確な読解とその内容についての受験者自身の思考力を問うている。

問1

実質的には英文和訳に近い問題であるが、下線部の前後の文章を的確に理解できていることが必要になる。

問2

下線部の前後の文章を的確に理解し、問題の前提になっている内容と、その答えの両方とを文章から正しく把握できているかを問うている。

問3

問1と同様、英文和訳に近い問題であるが、問題の前提を正しく把握するためには、文章全体を適切に理解する必要がある。

問4

英作文の問題である。文法的に正しい英文での回答はもちろんであるが、文章全体を適切に理解した上で、問われている内容がどのような文脈に基づいているのかどうかを理解し、受験生自身も自分なりの考えを表現する必要がある。

問題Ⅱ（日本語小論文）

問1

筆者の指摘する近代にいたる大学の変化を簡潔にまとめて理解できているかを問うた。

問2

筆者の指摘する「大学の変化」に見られる視点を位置づけることが出来るかとともに、これから大学に入る自己の視点から「大学の変化」をより普遍的に説明できるかを問うた。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ（英語）

問1

筆者が提起する立場（相手文化への過度な適応と自国の文化の過度な主張との間）の理解が鍵となる問題である。実際には、直前の段落を要約すればそのまま正解となるのだが、英語力不足のためか、日本文化と外国文化の差異という話に解釈してしまったり、外国文化を受け入れねばならない、もしくは、自国の文化を意地でも主張すべきであるとしてしまったり、両者の間という観点を理解できている解答は非常に少なかった。

問 2

筆者が議論している問題（自国と他者の文化の間で直面するにディレンマ）に答えを出そうとしない理由は何か、という問いだが、直前に電話の話が出ているために“answer”を「電話に出る」と解した受験生が多い（同様に直前の文に引っ張られて出自としての「ハーフ」と受け取る電話の「半数」に言及している回答も多いが、そもそも質問に対する答えはそこにはない。同じく“treat”を「いたずらする」と解釈した解答も多かった）。模範解答に近い回答はほとんど見られなかった。

問 3

まず、筆者が日本で暮らす外国人であることを理解していないと思える解答が目立ち、また、“colleague”を“college”と読み間違え、「大学」とした誤答が非常に多かった。全体的に、引用の和訳に終始し、筆者の説明する“a sense”を自分なりにまとめた解答が非常に少なかった。

問 4

やはり状況が把握できていないため、質問の意図が理解できていない解答が多かった。また、このような問いかけをしている筆者の「理由」を推測できているものが少なかった。何よりも英語の文章を書くに当たって、基本的なことが身につけていないものが非常に多かった。簡単な単語のスペルミスがあったり、主語に応じた動詞の変化が全く考慮されていなかったり、また、本文からそのまま文章を取り出しているようなものも目立った。

問題Ⅱ（日本語小論文）

問 1

本文中の4つの異なる変化を明確に示すことのできた答案が少なかった。異なる変化を因果関係のある1つの変化として捉えた答案があった。本文中の「専門学校」を「専門学校」と誤記した答案が多かった。

問 2

筆者の立場についての言及がないもの、筆者の立場が肯定的であることは捉えられているがその根拠が示されておらず、単なる印象の記述になってしまっているものが多かった。大学の変化に関し自身の考えを述べる点については、変化を肯定する理由として異文化理解の重要性を挙げるものが多く、そのため解答にあまり個性が感じられなかったように思う。

◆ 文学部人間関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

文章の出典は、在日米国大使館が発行する日英バイリンガルウェブマガジン“American View”に掲載された「ツイッターが変えるコミュニケーション（キャシー・オーウェンズ執筆）の抜粋を一部修正した内容となっている。本文では、ツイッターのような現代のソーシャルメディアが、情報の発信者と受信者の関係性を著しく変容させていることについて触れている。そのうえで、米国における近年の事例をもとに、こうした新しいメディアが社会の政治、経済、文化において幅広く影響を及ぼしつつあることについて述べられている。

この文章から、いまや若年層においても広く普及しているソーシャルメディアが、単にコミュニケーションの利便性をもたらしているだけではなく、それを介した情報の発信／受信が、身の回りの社会をどのように変容させているのかという点について、受験生個人の経験を超え、広く社会一般についての論理的かつ独創的な見解を述べる能力を問うたものである。

問1 設問直前までの文章の内容を読み取り、それらの内容を簡潔にまとめることのできる能力を問うた問題である。

問2 該当する段落の趣旨を理解し、設問について適切な文章内容を取り上げることのできる能力を問うた問題である。

問3 本文の要点にあたる文章を正しく理解し、英文を正確に読み取り和訳することができる能力を問うた問題である。

問4 設問の趣旨を踏まえ、それが示す内容について、とりわけその将来的な可能性について、個々人の経験にとどまらない独創的な見解について、論理的に記述することのできる能力を問うた問題である。

<答案の特徴と傾向>

問1

該当する箇所を断片的に直訳したものが多く、文章としての論理性や整合性に欠ける内容が多く見られた。

問2

パラグラフ7の意図する内容を理解できず、ツイッターの一般的な効果を憶測して記述した解答が多く見られた。

問3

長いセンテンス、とりわけ that 節を正確に訳していない解答が多く見られた。

問4

個人の経験の領域を大きく越えることがなく、この問が企図するソーシャルメディアの将来性に対する独創的な記述があまり見られない解答が多かった。この問題点について、問の文章が指示した条件（「下線部②の指摘を踏まえ」という条件）を十分に反映していないという理由によるものも多かった。

◆ 法学部 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

（1）出題文選択の背景

出典は、藤野寛『高校生と大学一年生のための倫理学講義』（ナカニシヤ出版、2011年）である。本書は、「価値」をめぐるさまざまな具体的問いを通して、一つの「正解」がない問題を考え続けることの面白さや大切さを説く、倫理学の入門書である。本問では、その中から、科学技術——特に生命倫理に関わる科学技術と生命の価値づけについて論じる章を取り上げた。

課題文はまず、科学技術の目的は自然支配にあるとした上で、その「進歩」に対しては、人間が自然（特に自らの身体という内的自然）に介入することそれ自体を批判する議論があることを紹介する。しかしそうした批判は、人間がすでに人間の身体を含め自然に対していくらかでも介入してきているという事実によって反駁される。筆者は、そのことを前提として、われわれの生きる「自由競争の社会」と「優生思想」との馴染みのよさ、「平等」という理念との両立のしにくさを指摘し、「本音のところでは、われわれは、『優生思想』という『差別の思想』の信奉者なのではないか」という刺激的な問いを発する。そして、優生思想の現代的実践として「遺伝子改造」を取り上げ、それによる「障害」の「除去」という発想が、「優れた生（命）」「劣った生（命）」、「良い人生」「幸せな人生」についての、われわれの恐ろしく画一的なイメージ、価値観を炙り出していると主張するのである。

現代社会においては、価値観の多様化とその共存という課題について語られることが多いが、逆に、生命や人生の「良さ」に関するわれわれの価値観の「画一性」を指摘する課題文を読み、法学部で学ぶ上で重要な「人間（生命）の尊厳」「個人の尊重」「個人の平等性」といった諸価値との関係を受験生に考えてもらうことが、出題のねらいである。

（２）受験生に何を望むか

まず、①上述した課題文の内容を理解し、筆者の主張の理由づけとなる部分を適切にまとめる力が求められる。次に、②筆者の主張を受けて、「生命の尊厳」「平等」、（課題文には直接は登場しないが）「人間の尊厳」「個人の尊重」といった諸価値との関係をどのように考えるか、自分の言葉で、論理的・説得的に論述することが求められる。

<答案の特徴と傾向>

設問は、「本音のところでは、われわれは『優生思想』という『差別の思想』の信奉者なのではないか」と筆者が考える理由をまとめた上で、そうした筆者の主張に対する受験生自身の考えを述べることを求めるものである。筆者の主張の理由を要領よくまとめた上で、適切な具体例と結びつけて自説を説得的・論理的に展開している答案や、筆者の問いかけを正確に理解し、それと真剣に向き合おうとする答案、われわれの生きる社会の現実を受け止めた上で、その克服に向けた取り組みを説得的に展開する答案などに対しては、高い評価を行った。

他方、筆者が優生思想を肯定していると理解したり、「差別はいけない」とする主張と矮小化したり、「平等」など文中の特定のキーワードに固執して理解するなど、課題文の読解力不足と思われる答案も散見された。また、前半のまとめは非常によく書けているにもかかわらず、後半でそれとは全く無関係に自説を展開する答案や、予め用意してきたであろう内容に無理矢理に結びつけている答案、さらには、きわめて重要な用語を誤っている答案（「優生思想」を「優性思想」「優先思想」とするなど）も目立った。

また、今回の設問では、「われわれは『優生思想』という『差別の思想』の信奉者なのではないか」と筆者が考える理由をまとめることを求めているにもかかわらず、「・・・という理由で筆者は優生思想に賛成／反対している」といった答え方をしている答案も見られた。設問をよく読み、何が問われているのか、それに対してどう答えるべきなのかを適切に理解してから、答案作成に当たってほしい。

関連して、小論文作成の特定のフォーマットに固執しているように見える答案も散見された。たとえば、「私は筆者の意見に賛成／反対である」から書き出し、最後に何か提案をして締める、といったパターンである。それが妥当する場合もあるだろうが、当然ながら問題ごとに求められる内容は異なっている。基本的には、予め用意してきたフォーマットに嵌め込もうとせず、これまでに培った読解力や構成力、文章力などを動員して、与えられた問題に正面から向き合ってもらいたい。

◆ 地域創生学群 推薦入試（面接）

I 全国推薦（地方創生推薦）

<面接の意図・ねらい>

以下に示したような、地域創生学群で学ぶ上で必要な力やアイデアを持てているのかを判断するために、面接試験を実施しました。

- 多様な人々と共に学ぶ上で必要となるコミュニケーション能力があり、地域創生学群を詳しく理解しており、本学群で学ぶことを強く意識することができている。
- 地域活動について、事前課題を基に、具体的な計画を立てることができている。
- 自分の将来プランの実現に向けて、情報を整理、分析し、どのように取り組めばよいか構想力を持つことができている。

<受験生の特徴と傾向>

多くの受験生が、レベルの高い事前課題を作成することができていました。事前課題の内容を踏まえた質疑応答についても、しっかりと考え、丁寧に説明しようとする姿勢が見られました。一方で、指定された形式を守ることができておらず、また地域創生学群で学ぶということが希薄な受験生も見られました。そのような受験生については、評価を低くしました。

II 特別推薦（活動実績推薦）

<面接の意図・ねらい>

特別選抜では、受験生のコミュニケーション能力、態度、活動の継続性と今後のビジョン、自らの卓越した能力を地域活動においてどのように発揮・貢献しようと考えているのかということについて、わかるような面接試験を実施しました。

<受験生の特徴と傾向>

事前に提出された活動実績では、大変顕著な実績を有する受験生が多く、大変レベルの高い内容でした。その上で、単に「卓越した能力」を有しているというだけでは無く、その能力を持って地域創生にどのようにして発揮・貢献しようと考えているのかが明確に持つことができた受験生については、高い評価としました。

◆ 国際環境工学部エネルギー循環化学科 推薦入試（総合問題・面接）

【総合問題】

<出題の意図・ねらい>

第1問

問1 ポリマーがモノマーに加水分解する反応の基本知識（反応で必要となる水分子ならびに生成するモノマーの数）を問うた。これはタンパク質がアミノ酸に分解する時の化学反応式を問題の主体としたものである。

問2 酸化反応に関する基礎的な知識を問うたもので、アンモニアの酸化による硝酸の生成反応を式で表

すものである。

問3 文章で説明した化学反応を式で表現して関連の物質質量(mol)や気体の体積(L)を算出するもので、論理的考察力を問うことを意図したものである。

第2問

理想気体について、状態方程式や分圧、化学反応による物質質量の変化に関する基礎的な知識と組み合わせの応用力を問う内容である。

問1 理想気体の状態方程式の使い方の問題である。

問2 理想気体の混合条件下における1成分量を算出する問題である。(分圧の理解を問う内容)

問3 理想気体の移動における変化量を算出する問題である。

問4 混合した理想気体の化学反応前後における各成分量を導出する内容である。(化学反応の分圧への影響の理解を問う内容)

問5 問4の続き

問6 気-液変化(気体の凝縮)が起こる条件下での、変化の前後における各成分量を導出する内容である。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1では多くの受験生が化合物の係数を正しく答えられていた。問2ではほとんどの解答で化学反応式を正しく表現できていたものの、一部の解答ではこれらの物質を正確に記述できていなかった。問3では、三つの小問の内、物質量を単純に計算するだけの設問では正しい解答が多かったが、気体の状態方程式($pV = nRT$)も組み合わせて気体の体積を算出する設問3では温度の影響を考慮できていない解答がほとんどであった。

第2問

理想気体に関する内容において、標準状態ではない条件下での状態方程式の使い方に対する理解に極端に大きな差が現れた。また、混合気体における分圧の理解および化学反応を通じた物質質量の変化への理解が不十分であることが見てとれた。

【面接】

<面接内容>

本学への志望動機、就学意欲、将来の進路などを最初に質問した。その後、基礎的な化学の知識に関する質問を行い、基礎学力、意欲、コミュニケーション能力等の項目について評価した。

<受験生の特徴と傾向>

志望動機に関して、ほとんどの受験生が事前に本学科の教育研究分野を調べて、準備してきた内容を説明した。化学の基礎的質問に対しては、完全に回答できた学生は少なかった。

◆ 国際環境工学部機械システム工学科 推薦入試（総合問題・面接）

【総合問題】

<出題の意図・ねらい>

第1問（数学）

三角関数、二次方程式、確率、数と式に関する問題。それぞれについて基本的知識が身についているかを問う。

- 問1 三角比、正弦定理・余弦定理についての基本的な知識を問う問題である。
- 問2 二次方程式の実数解と判別式の関係などについての基本的な知識を問う問題である。
- 問3 確率の基本問題である。
- 問4 無理数に関する基本問題である。
- 問5 根号を含む式の計算に関する基本問題である。

第2問（数学）

2つの放物線とその共通接線で囲まれた図形の面積を求める標準的な難易度の問題である。本問は、高校数学の基本的な知識と解答を導くために必要となる論理的思考力の確認を意図したものであり、題意を正確にくみ取った上で解答することを期待した。

- 問1 接線の方程式についての基本的な知識を問う問題である。
- 問2 2つの放物線に接する共通接線を求めるために必要となる基本的な知識と論理的思考力を問う問題である。
- 問3 放物線と直線の位置関係についての基本的な知識を問う問題である。
- 問4 2つの放物線とその共通接線で囲まれた図形の面積を求めるために必要となる基本的な知識と論理的思考力を問う問題である。

第3問（物理）

- 問1 物体の運動に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。
- 問2 主に熱力学に関する基本的な内容が正しく理解されていることを確認した問題である。
- 問3 電気に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

基本的な問題であり、いずれの問題も正解率は高めであった。問題ごとに比較すれば、二次方程式に関する問2、確率の問3の正解率が低かった。

第2問（数学）

- 問1 放物線上の点における接線の方程式を求める基本的な問題であったため正答率は高かった。
- 問2 2つの放物線の共通接線を求めるにあたり、一方の放物線に接する直線がもう一方の放物線にも接するという条件をどのように表すかが要点となる。答案の傾向として、題意を正確にくみ取れていないものや条件を式で表現する際に誤っているものが多く、完答にまで至った答案は少なかった。
- 問3 放物線と直線の接点を求める基本的な問題であったが、計算の誤りが多かった。
- 問4 問1から問3までの解答を踏まえて、2つの放物線とその共通接線で囲まれた図形の面積を求める

基本的な問題であったが、定積分を使用して求める面積を正しく表現している答案は少なく、完答にまで至った答案は非常に少なかった。

第3問（物理）

問1 正答率は余り高くなく、特に問題オの正答率が低かった。物体の運動を問題文から正確に読み取り、その状況をしっかりとイメージできる能力を養って欲しい。

問2 どれも基本的な事柄を理解していれば、正答できた問題である。理解度が不足している受験生が多かったようで、全体的な正答率は概ね高くない状況であった。

問3 コンデンサのつなぎかえは電気の基礎的な理解度を確認する基本的な問題であるが、正答率はあまり高くなく、特にコンデンサのスイッチを切り替える問題エ、オの正答率が低かった。電荷保存の法則と回路電位の原則の理解度が不足している受験生が多かったようである。

【面接】

<面接内容>

受験生19名に対し、1人約10分の個人面談を実施した。

(1) 本学科を志望した動機および高等学校時代に学業意外で取り組んだ事。

(2) 最近気になったニュースやトピックス。

(3) 大学入学後に取り組みたい事。

主に、上記3点について質問を行い、コミュニケーション能力や就学意欲を確認した。

<受験生の特徴と傾向>

志望動機では、高齢者の介護問題をきっかけにしたロボット関連の話、および地球温暖化をきっかけにした燃料電池・エンジン関連の話について述べる受験生が非常に多かった。ニュースやトピックでは、博多駅前の陥没事故について述べる学生が多かった。また、ほとんどの受験生が高等学校ではクラブ活動を積極的に行っており、大学入学後もクラブ活動を継続したいと述べていた。さらに、約90%の受験生が、すでに大学院への進学を考えていると述べていた。

◆ 国際環境工学部情報メディア工学科 推薦入試（総合問題・面接）

【総合問題】

<出題の意図・ねらい>

第1問（数学）

三角関数、二次方程式、確率、数と式に関する問題。それぞれについて基本的知識が身についているかを問う。

問1 三角比、正弦定理・余弦定理についての基本的な知識を問う問題である。

問2 二次方程式の実数解と判別式の関係などについての基本的な知識を問う問題である。

問3 確率の基本問題である。

問4 無理数に関する基本問題である。

問5 根号を含む式の計算に関する基本問題である。

第2問（数学）

2つの放物線とその共通接線で囲まれた図形の面積を求める標準的な難易度の問題である。本問は、高校数学の基本的な知識と解答を導くために必要となる論理的思考力の確認を意図したものであり、題意を正確にくみ取った上で解答することを期待した。

問1 接線の方程式についての基本的な知識を問う問題である。

問2 2つの放物線に接する共通接線を求めるために必要となる基本的な知識と論理的思考力を問う問題である。

問3 放物線と直線の位置関係についての基本的な知識を問う問題である。

問4 2つの放物線とその共通接線で囲まれた図形の面積を求めるために必要となる基本的な知識と論理的思考力を問う問題である。

第3問（物理）

問1 物体の運動に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。

問2 主に熱力学に関する基本的な内容が正しく理解されていることを確認した問題である。

問3 電気に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

基本的な問題であり、いずれの問題も正解率は高めであった。問題ごとに比較すれば、二次方程式に関する問2、確率の問3の正解率が低かった。

第2問（数学）

問1 放物線上の点における接線の方程式を求める基本的な問題であったため正答率は高かった。

問2 2つの放物線の共通接線を求めるにあたり、一方の放物線に接する直線がもう一方の放物線にも接するという条件をどのように表すかが要点となる。答案の傾向として、題意を正確にくみ取れていないものや条件を式で表現する際に誤っているものが多く、完答にまで至った答案は少なかった。

問3 放物線と直線の接点を求める基本的な問題であったが、計算の誤りが多かった。

問4 問1から問3までの解答を踏まえて、2つの放物線とその共通接線で囲まれた図形の面積を求める基本的な問題であったが、定積分を使用して求める面積を正しく表現している答案は少なく、完答にまで至った答案は非常に少なかった。

第3問（物理）

問1 正答率は余り高くなく、特に問題オの正答率が低かった。物体の運動を問題文から正確に読み取り、その状況をしっかりとイメージできる能力を養って欲しい。

問2 どれも基本的な事柄を理解していれば、正答できた問題である。理解度が不足している受験生が多かったようで、全体的な正答率は概ね高くない状況であった。

問3 コンデンサのつなぎかえは電気の基礎的な理解度を確認する基本的な問題であるが、正答率はあまり高くなく、特にコンデンサのスイッチを切り替える問題エ、オの正答率が低かった。電荷保存の法則と回路電位の原則の理解度が不足している受験生が多かったようである。

【面接】

<受験生の特徴と傾向>

面接では、本学志望理由・入学後の学業・卒業後の進路に関して質問を行い、受験生の就学意欲の高さ、ビジョンの明確さに関して評価を行った。また口頭試問では、数学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・A・B（数と式、二次関数、三次方程式、図形の性質、三角関数・対数関数、整数の性質、極限）の中から基本的な知識の理解度を確認する質問を複数回行った。

面接ではどの受験生も、志望理由、入学後に取り組みたい学業、卒業後の希望進路に対して明確に意見を述べていた。口頭試問に関しては、二次方程式の実数解の個数と判別式の符号の関係の理解が曖昧な受験生が多かったが、その他の項目に関してはよく理解していた。

◆ 国際環境工学部建築デザイン学科 推薦入試（総合問題・面接）

【総合問題】

<出題の意図・ねらい>

第1問（数学）

三角関数、二次方程式、確率、数と式に関する問題。それぞれについて基本的知識が身についているかを問う。

- 問1 三角比、正弦定理・余弦定理についての基本的な知識を問う問題である。
- 問2 二次方程式の実数解と判別式の関係などについての基本的な知識を問う問題である。
- 問3 確率の基本問題である。
- 問4 無理数に関する基本問題である。
- 問5 根号を含む式の計算に関する基本問題である。

第2問（物理）

- 問1 物体の運動に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。
- 問2 主に熱力学に関する基本的な内容が正しく理解されていることを確認した問題である。
- 問3 電気に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。

第3問（造形）

- 問1 建築のデザインを行う上で基礎的な素養として必要な立体的な空間の認識力・想像力、三次的な表現力、スケッチによる描写力等の総合的な造形力を見る。
- 問2 与えられたテーマに対して的確に題意を捉え、自らの見解を論理的に述べているかを問う問題である。特に、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見る。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

基本的な問題であり、いずれの問題も正解率は高めであった。問題ごとに比較すれば、二次方程式に関する問2、確率の問3の正解率が低かった。

第2問（物理）

- 問1 物体の運動に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。
- 問2 主に熱力学に関する基本的な内容が正しく理解されていることを確認した問題である。
- 問3 電気に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。

第3問（造形）

- 問1 部材を組み合わせて家具を提案する問題に対して家具として一定のレベルの案を提示していた答案が多く、題意は良くとらえられていたと考える。しかし、オリジナリティのある案は多くなかった。具体的な部材の寸法を提示していたにもかかわらず、厚みの表現のないものが散見されたのも残念であった。
- 問2 自らの提案に対して一定の説明はできていたが、論理的に、最適な表現で説明できているものはあまり多くなかったのが残念であった。また、日本語として文法的に問題のある文章も多く、基礎学力の向上が望まれる。

【面接】

<面接内容>

10分程度の個別面接を行った。

- ・志望動機、高校生活の充実度や実績
 - ・本学科の教育目的・内容・特色の理解度
 - ・日常生活において、社会の出来事などに対する興味や意識の高さを確認
 - ・戸建住宅において「リビング、ダイニング、キッチン」を1階または2階に配置する場合のメリットとデメリット
 - ・理科系に進学した理由や将来に対する考えを確認
 - ・本人の長所を確認
- に関する質問をし、回答を求めた。

<受験生の特徴と傾向>

- ・志望動機や本学科の教育目的など事前に準備していた質問に対しては、内容を丸暗記して回答する受験生が目立つ一方、調べた内容をきちんと理解し自らの言葉で回答する受験生もみられた。
- ・社会の出来事などは、建築関連に対する興味や意識が高いことが強く感じとられた。
- ・想定外の質問に対しては、自分の考えを落ち着いて論理的に述べることができる受験生がいたものの、自分の考えをうまく表現できない受験生もみられた。
- ・多くの受験生は大学卒業後の将来をきちんと考えており、とくに、建築士を目指す受験生や大学院進学を希望している受験生もみられた。

◆ 国際環境工学部環境生命学科 推薦入試（総合問題・面接）

【総合問題】

（第1問 必須）

（第2問 A, B, Cから1題選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

問1 ポリマーがモノマーに加水分解する反応の基本知識（反応で必要となる水分子ならびに生成するモノマーの数）を問うた。これはタンパク質がアミノ酸に分解する時の化学反応式を問題の主体としたものである。

問2 酸化反応に関する基礎的な知識を問うたもので、アンモニアの酸化による硝酸の生成反応を式で表すものである。

問3 文章で説明した化学反応を式で表現して関連の物質質量(mol)や気体の体積(L)を算出するもので、論理的考察力を問うことを意図したものである。

第2A問（物理）

問1 物体の運動に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。

問2 主に熱力学に関する基本的な内容が正しく理解されていることを確認した問題である。

問3 気に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。

第2B問（生物）

問1 細胞分裂について、植物と動物の体細胞分裂の違い、また体細胞分裂と減数分裂の違いを正しく理解しているかを問う問題である。

問2 DNAの4種の塩基の相補的結合の理解を確認する問題である。

問3 微生物の呼吸およびアルコール発酵の理解を、計算を通して問う問題である。

第2C問（化学）

理想気体について、状態方程式や分圧、化学反応による物質質量の変化に関する基礎的な知識と組み合わせの応用力を問う内容である。

問1 理想気体の状態方程式の使い方の問題である。

問2 理想気体の混合条件下における1成分量を算出する問題である。（分圧の理解を問う内容）

問3 理想気体の移動における変化量を算出する問題である。

問4 混合した理想気体の化学反応前後における各成分量を導出する内容である。（化学反応の分圧への影響の理解を問う内容）

問5 問4の続き

問6 気-液変化（気体の凝縮）が起こる条件下での、変化の前後における各成分量を導出する内容である。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1 では多くの受験生が化合物の係数を正しく答えられていた。問2 ではほとんどの解答で化学反応式を正しく表現できていたものの、一部の解答ではこれらの物質を正確に記述できていなかった。問3 では、三

つの小問の内、物質量を単純に計算するだけの設問では正しい解答が多かったが、気体の状態方程式($pV = nRT$)も組み合わせて気体の体積を算出する設問3では温度の影響を考慮できていない解答がほとんどであった。

第2A問 (物理)

- 問1 物体の運動に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。
- 問2 主に熱力学に関する基本的な内容が正しく理解されていることを確認した問題である。
- 問3 電気に関する基礎的な知識の理解度を確認する問題とした。

第2B問 (生物)

- 問1 概ね理解していたが、正確に説明できた解答は半分程度であった。
- 問2 4種の塩基の相補的結合についての理解度は高かったのに対し、式にアレンジした問題に対して正答率が低くなっていた。
- 問3 (1)の問題は基本的な化学反応式であるのに、正答率が低かった。その結果、(2)～(4)の問題についても正しい解答は少なかった。

第2C問 (化学)

理想気体に関する内容において、標準状態ではない条件下での状態方程式の使い方に対する理解に極端に大きな差が現れた。また、混合気体における分圧の理解および化学反応を通じた物質量的変化への理解が不十分であることが見てとれた。

【面接】

<面接内容>

志望動機、最近の報道等で関心を持った事項についての説明、大学生として必要な能力などについての質問を行い、それに対する受け答えから意欲、コミュニケーション能力、学力、理解力について評価を行った。

<受験生の特徴と傾向>

面接者の質問に耳を傾け、それについてしっかりと説明ができていた。ただし、説明に用いた語の意味を適切に述べられなかった受験生もいた。

平成 29 年度入試の出題の意図、採点総評 《AO入試》

◆ 外国語学部英米学科 AO入試

<出題の意図・ねらい>

1. 英文読解力と講義の聴解力を見る問題。英文はやや難易度が高い部分もあったが、論理的に記されていた。講義を良く聴いていれば正しい内容理解ができたはずである。それができているかどうかの評価のポイントである。
2. 模擬授業担当教員の説明を頭置きながら英文を読み、その上で自分の考えを論理的に述べることが出来るかどうかを見る問題。語学力を超えた総合力を判断する問題である。前年度はこの問の前に小設問が用意されていたが、本年度はこの問題に集中して解答してもらうよう変更した。

<答案の特徴と傾向>

1. 課題文は論旨が明確で、講義もよく整えられたわかりやすい展開だったため、この問題の正解率は非常に高かった。
2. 本試験で最も重要な設問である。模擬授業担当教員の説明を正しく理解して英文を読み、自分の考えを論理的に論述できた答案は評価が高くなっている。表現力はあっても課題文の読み取りおよび講義の聞き取りが不十分な人の場合、評価は低くなっている。

<二次試験面接のポイント>

一次試験において英語の読解力および論述力を見ているので、二次試験では、口頭で意見を述べる力を見ることと、今後英米学科で学習していく上での適性を判断することがポイントとなったが、合格者はいずれも高い能力と適性を示していた。

◆ 地域創生学群 AO入試

<出題の意図・ねらい>

地域創生学群における今年度のAO入試では、一次選抜において、模擬授業を聴講して作成するレポート課題を行いました。二次選抜では、集団面接としてグループディスカッションとその内容の発表、個別面接では集団面接の課題への取り組みについての振り返りと、そして地域創生学群で何をどのようにして学びたいのかを何う内容としました。

これらの出題の意図・ねらいは、地域創生学群に入学してから求められる基礎学力、コミュニケーション能力、共同・協働性、経験から学ぶ力、そして地域創生学群で学びたいという意欲を十分に持っており、自分の言葉で表現することができるか、あるいはその可能性を秘めているのかということを確認する点にありました。

<答案の特徴と傾向>

一次選抜

一次選抜では、地域創生において必要とされる協働について模擬授業を展開しました。「共同」ではなく「協働」とはどのようなものか、その難しさ、協働の成立条件と継続条件、そして協働と地域創生学群という内容について述べていきました。この模擬授業の内容は、大学で地域創生を学びたいと考えている高校生には、コースを問わず、必須の考え方であるため今年度の模擬授業の内容としてふさわしいものであると考え、実施いたしました。

レポート課題では、講義内容を通して講師の伝えたかったことを要約して論述するというものでした。答案の傾向としては、講師の伝えたかった内容を丁寧にまとめることができている答案が多くみられました。文字数が極端に少ない、誤字脱字が多いレポートについては、減点対象としました。

二次選抜

二次選抜では、集団面接と個別面接を実施しました。集団面接ではグループで取り組む課題を、時間を区切りながら取り組んでいただきました。「入学後の4年間で北九州においてどのような活動ができるか」ということを、グループで検討していただき、グループとしての活動案を考えていただきました。そして、それまで話し合ってきた内容をポスターとしてまとめ、全員で発表をしていただきました。個別面接では、集団面接についての取り組みについてふりかえっていただき、地域創生学群で何をどのように学びたいと考えているのかをお伺いしました。

集団面接では、多くの受験生がコミュニケーション能力を発揮し、チームとして課題に取り組むことができていました。個別面接でも、多くの受験生が自己の経験をふりかえり、そこから学ぶことができていました。しかし、そのような中でも、表面的なコミュニケーション、他者の話を傾聴することができない、あるいは自己を客観的にふりかえることができない、そして何より地域創生学群での学びについて明確な意欲を持つことができていないと思えるような受験生もいました。このような受験生については、大きく減点対象としました。